

## 鹿児島の地質35 桜島大正噴火の驚異

地質担当 鈴木 敏之

桜島は、平成26(2014)年1月12日で、大正3(1914)年の大噴火から100年の節目を迎えます。86号(7月号)に引き続き、県立博物館が所蔵する桜島大正噴火の記録写真から、噴火当時の様子を振り返り、「大正噴火の驚異」に迫ってみたいと思います。

1 溶岩流に埋没した<sup>からすじま</sup>鳥島

1914(大正3)年1月12日の大噴火前には、西側海岸の沖合い約500mのところに、鳥島がありました。(下図参照：中央が鳥島)



噴火前の桜島西部(大正2年7月撮影)

翌日の13日に中腹の引ノ平付近から溶岩が流れ出し、鳥島は溶岩の下約20mに埋もれてしまいました。海を隔てた1つの島を溶岩がのみこむ現象は火山史上でも珍しいことです。溶岩流は、16日になると小池、横山、赤水の集落を埋め、ついに海中に流れ込みました。



鳥島をのみこむ溶岩流(大正3.1.18撮影)



北岳から西側溶岩原を望む(大正4.1.4撮影)

1月18日には鳥島周辺の海を埋め立て、翌日には鳥島の所在もわからなくなりました。(現在は埋没の記念碑が建立されています。)

## 2 桜島が大隅半島と陸続きに...

東側の火口からも1月13日の夜、溶岩の流出が始まり、有村、脇、瀬戸の集落を埋め、瀬戸海峡へ流れ込みました。この溶岩は2月1日午後4時頃、幅約400mの瀬戸海峡を埋め、桜島と大隅半島を陸続きにしました。



噴火前の瀬戸海峡(撮影日は不明)



有村から見た瀬戸海峡(撮影日は不明)



瀬戸海峡接続の様子(大正3.1.27撮影)